### n次実対称行列の対角化

Nobuyuki TOSE

January 05, 2020

### 定理1

### 定理1

n 次の実対称行列  $A \in M_n(\mathbf{R})$  に対して  $\alpha, \beta \in \mathbf{R}$  が相異なる場合: $\alpha \neq \beta$ 

$$V(\alpha) \perp V(\beta)$$

が成立します.

$$(A\vec{p}, \vec{q}) = (\alpha \vec{p}, \vec{q}) = \alpha(\vec{p}, \vec{q})$$

$$(A\vec{p},\vec{q}) == (\vec{p},{}^tA\vec{q}) = (\vec{p},A\vec{q}) = (\vec{p},\beta\vec{q}) = \beta(\vec{p},\vec{q})$$

から

$$(\alpha - \beta)(\vec{p}, \vec{q}) = 0$$

が従います.

(ロト 4 個 ト 4 差 ト 4 差 ト ) 差 · かくで

### 定理2

#### 定理2

3次の実対称行列 A に対して以下が成立します.

(1)

$$\Phi_{A}(\lambda) = (\lambda - \alpha_{1})(\lambda - \alpha_{2}) \cdots (\lambda - \alpha_{n}) \Rightarrow \alpha_{1}, \alpha_{2}, \dots, \alpha_{n} \in \mathbf{R}$$

(2) 直交行列  $P \in O(n)$  が存在して

$$P^{-1}AP = \begin{pmatrix} \alpha_1 & 0 & \cdots & 0 & 0 \\ 0 & \ddots & & \vdots \\ 0 & 0 & \cdots & 0 & \alpha_n \end{pmatrix}$$

が成立します.

# 定理2の証明(1)

(2) を証明します.  $\alpha_1$  に対して

$$A\vec{p}_1 = \alpha\vec{p}_1, \ \|\vec{p}_1\| = 1$$

を満たす  $\vec{p}_1 \in \mathbb{R}^3$  が存在します. このとき以下が成立します.

 $V := (\mathbf{R}\vec{p}_1)^{\perp}$  は A 不変である. すなわち

$$\vec{v} \in V \Rightarrow A\vec{v} \in V$$

実際  $\vec{p}_1$ ,  $\vec{v} = 0$  とすると

$$(\vec{p}_1, A\vec{v}) = ({}^t A\vec{p}_1, \vec{v}) = (A\vec{p}_1, \vec{v}) = \alpha_1(\vec{p}_1, \vec{v}) = 0$$

から分かります.

## 定理2の証明(2)

正規直交基底の延長を用いて R<sup>n</sup> の正規直交基底

$$\vec{p}_1, \vec{p}_2, \ldots, \vec{p}_n$$

が構成できます.  $\vec{p}_2, \dots, \vec{p}_n$  が V の正規直交基底であることに注意しましょう.

直交行列  $P=(\vec{p}_1 \cdots \vec{p}_n) \in O(n)$  を定義します.このとき  $2 \leq j \leq n$  のとき  $\vec{p}_j \in V$  から  $A\vec{p}_j \in V$  が分かります.従って

$$A\vec{p}_j = *\vec{p}_2 + \cdots + *\vec{p}_n$$

から

$$AP = (A\vec{p}_1 \ A\vec{p}_2 \ \cdots \ A\vec{p}_n) = (\vec{p}_1 \ \vec{p}_2 \ \cdots \ \vec{p}_n) \begin{pmatrix} \alpha_1 \ 0 \ \cdots \ 0 \\ \vdots \ B \\ \vdots \end{pmatrix} = P \begin{pmatrix} \alpha_1 \ 0 \cdots \ 0 \\ 0 \ \vdots \ B \\ \vdots \end{pmatrix}$$

となります

→ □ ト → □ ト → 三 ト → 三 → つへの

# 定理2の証明(3)

$${}^{t}PAP = \begin{pmatrix} \alpha_1 & 0 & \cdots & 0 \\ 0 & & & & \\ \vdots & & B & & \\ 0 & & & & \end{pmatrix}$$

の左辺は

$$^{t}\left(^{t}PAP\right)={}^{t}P^{t}A^{t}\left(^{t}P\right)={}^{t}PAP$$

から対称であることが分かります. 右辺が対称であることと右辺の転置が

$$\begin{pmatrix} \alpha_1 & 0 & \cdots & 0 \\ 0 & & & \\ \vdots & & {}^t B \\ \vdots & & 0 \end{pmatrix}$$

となることから

$$^{t}B=B$$

であることが分かります.

4□ > 4ⓓ > 4≧ > 4≧ > ½

# 定理2の証明(4)

B が対称であることから  $Q_0 \in O(n-1)$  が存在して

$$^{t}Q_{0}BQ_{0}=\left( \begin{array}{c} eta_{2} & & \\ & \ddots & \\ & & eta_{n} \end{array} \right)$$

となります.  $Q:=\left(\begin{smallmatrix}1&Q_0\end{smallmatrix}\right)\in O(n)$  で

$${}^{t}Q^{t}PAPQ = \begin{pmatrix} 1 & & \\ & {}^{t}Q_{0} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \alpha_{1} & \\ & B \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & \\ & Q_{0} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \alpha_{1} & & \\ & & & \\ & & \ddots & \\ & & & \beta_{n} \end{pmatrix}$$

から  $R = PQ \in O(n)$  で  ${}^tR = {}^tQ^tP$  なので

$${}^{t}RAR = \left( {}^{\alpha_{1}} {}_{{}^{t}Q_{0}BQ_{0}} \right) = \left( {}^{\alpha_{1}} {}_{\beta_{2}} \right)$$

◆□▶ ◆□▶ ◆壹▶ ◆壹▶ · 壹 · かへ○